

様式③

提出日 2019年1月11日

## 2018年度 琉球弧研究支援 報告書

研究テーマ「 宮古方言 」

氏名：狩俣結奈 笠真央 玉城優希

所属学部学科：人文学部 こども文化学科

## I. 初めに

沖縄本島の方言は大きく分けて、北部、中部、南部ごとに違いがある。対して宮古方言は、宮古島本島方言、池間島方言、大神島方言、来間島方言、伊良部島方言のように、宮古島市内で地域差があり、また、各島々でも集落ごとに違いがみられる。

今回は、主に宮古島本島の狩俣地域の方言、伊良部島の方言について、話を聞くことができた。

## II. 研究の目的、動機

宮古方言は、ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）により消滅危機言語の「危険」に分類されていることを知り、興味が沸いたことが動機である。

現地の方々がこの状況を把握しているのか、またどう受け止めているのかについての話を聞き、私たちがそのことを資料として残すことで、人々の思いを残すことにもつなげようとするのを目的とした。

## III. 研究方法、地域、期間

実際に宮古島へ行き、現地の方々にインタビューを行った。あらかじめ、伊良部島の佐良浜地域に住む 60 代男性、宮古島の狩俣地域に住む 70 代男性には協力をお願いして取材をさせてもらった。そのほかにも、佐良浜地域での街頭インタビューも行った。また、インタビューの際にいただいた「佐良浜先祖の遺産」という資料も研究で使用した。調査期間は平成 30 年 10 月 7 日～10 月 10 日である。

○伊良部島と狩俣地域の人口と世帯数

【平成 27 年 10 月 1 日現在人口・世帯数出典元：平成 27 年国勢調査 [posting-nippon.com](http://posting-nippon.com)】

	人口	世帯数
伊良部島	4 7 6 9	2 0 7 2
狩俣	5 5 8	2 3 5

## IV. インタビューから

○伊良部島の佐良浜地域在住の 70 代女性（3 人）

海岸で夕涼みしているところをインタビュー

### Q 1. 消滅危機言語になっていることについて

私たちだけなら話すけど、子供たちには普段使わず、方言を話さないようにしているからだと思う。

### Q 2. 沖縄本島と、宮古島の方言について

相互理解はない。方言が少しずつ入ってきているけど、べらべら話せるわけではない。

### Q 3. 方言札について

方言札は緑で、お家で方言を使う人は黄色、お家でも学校でも使う人は赤色と、色が決まっていて、安全ピンで生地を服にとめる形で使っていた。共通語を話せるようにするための取り組み。

#### **Q 4. 方言を次の世代に伝える手段について**

訳して教えていかないと厳しい。少しは聞き取れるかもしれないが、読み書きも加えて、英語のように教えていかないと難しい。

#### ○国吉忍さん（昭和 25 年生まれ 現在 68 歳）

##### **Q 1. 消滅危機後になっていることについて**

方言はなくなるものだと思っている。子や孫の世代が使わないから、自分たちの世代も使う機会が減った。

##### **Q 2. 子や孫と話すときについて。**

方言は 1 割しか使わない。子供たちも聞いてはいるけど、全部は分かっていないと思う。読むことも難しい。おじい、おばあがいる家庭でも方言を使うことは少ない。自分たちの世代だと、9 割は方言。子や孫と話すときはがんばって標準語にしている。

##### **Q 3. 地域が違ったら言葉は伝わるのか。**

昔は、船で学校に通ったり、間借りして高校も通っていたりしたから、会話は難しかった。池間、佐良浜、西辺、旧平良、上間、国仲、長浜、佐和田は変わっていて、読むのも大変。伊良部島の中でも、伊良部、仲地、国仲、長浜、佐和田でちょっとずつ変わっているけど、だいたい通じる。私は完全には分からない。

##### **Q 4. 部落ごとに違うのはなぜなのか。**

移民の関係だと思っているが、そこまでは分からない。佐良浜の場合は、池間島（長男坊）から佐良浜にきて（次男坊）、西辺に移った（三男坊）というのは聞いている。

##### **Q 5. 那覇の言葉（首里方言）は分かるのか。**

那覇で暮らしている人は分かるが、島（宮古島）にいる人は分からない。一つ一つの単語は理解できるはずだけど、続けて言われたら分からない。

##### **Q 6. 孫たち世代に方言を伝える手段について。**

家庭で話そう、使おうということが大事。個々の家庭でそれぞれ伝えていくことで、島の言葉を大事にしていくことにつながる。

#### ○根間義男さん（昭和 18 年生まれ 現在 76 歳）

##### **・狩俣地域の方言について。**

狩俣のアクセントは独特で、内地のなまりに近いのではないかとされている。戦前、狩俣の人たちが出稼ぎ（女性は女工さん、男性は造船場）に行くと、日本語に順応されやすいと言われていた。イントネーションが標準語に溶け込みやすい。宮古島のなかでも、狩俣はなまりがないと言われている。人相も内地の人に近いという人

が多いという。

**Q 1. 消滅危機言語になっていることについて。**

知っている。いずれは消滅していると思う。

**Q 2. 方言札について**

4〜5歳下まではあった。方言を使うと、札をかけられる。別に悪いことじゃないのに。札は木の板に紐がついているもので、自分がかけられたら誰かに体当たりして「アガ」と言わせて札をまわした。生徒間では遊び感覚で、楽しみの一つとなっていた。当時は抵抗なく取り組んでいたが、めちやくちやな教育だと思う。

**Q 3. 狩俣のことばは生活の中でどのくらいつかっていますか。**

同年代だと24時間使用しているが40代からは方言で会話することは厳しい。(義男さんの30歳下くらい)

**Q 4. 他の地域の人と話すときの手段について。**

それぞれの地域の方言で話しても、お互いにだいたい意味は通じる。でも、大神島の方言は分からない。全然違う。

**Q 5. 地域によって違いがあるのはなぜか。**

先祖の問題ではないかと思う。

**Q 6. 現在の「方言を残そう」という取り組みについて。**

方言に関心を持たせる程度だと思う。つかって初めてものになる。つかう人がいなくなったらどんな手を使っても厳しい。日常の中でペラペラと会話するところまでは無理だと思う。私たちの世代があと20年ほど生きるとして、そのあとからは消滅していく見込み。

**Q 7. 消滅することへの気持ちについて。**

その地域で話されていることばがなくなるということは、その地域そのものがなくなるということ。狩俣という地域がなくなる、宮古島という島がなくなるということ。だから、みなさんに抵抗してほしい。少しでも長く残してもらわないと困る。だけど、この現状は綱引きといっしょ。今の取り組みも、現在盛んになっている取り組みも、いつ終わるにかかっている。

**V. 考察、分析**

今回の調査から、なぜ方言は消滅危機にあるのかについて考え、3つの点が挙げられた。

- ・方言札の影響、標準語の普及
- ・家庭での使用機会の減少
- ・電子機器やSNSの誕生、発達

以上の3つである。すなわち日常の生活において、使う必要性和機会がないということが、消滅危機の最も大きな要因であると考えられる。

## VI. 今後の展望

今回、実際に現地の方々の声を聞いて、地域による違いや、方言自体の意味を理解すること、使用頻度など、方言が世代を超えて伝わっていくことは簡単なことではないことを実感した。私たちが方言世代の方々と会話ができるまでに、方言を習得することは難しいかもしれない。しかし、方言に対する関心、方言を大切にする意識を持ち続けていきたい。

## VII. 終わりに

お忙しい中、本研究にご協力していただいたみなさんに心から感謝いたします。

## VIII. 参考文献、調査協力

- ・『佐良浜先祖の遺産』（著者：譜久村和海）

## IX. 指導教員コメント

素朴な疑問を地域の方に直接質問して聞いてみるという方法がとても新鮮で楽しい調査報告書になっていると思います。

調査も同行させてもらいましたが、チームワークもよく、みんながきちんと問題意識を明確にもっていたことがとても良かったです。

地域の言葉を残すことが重要だと言うことは簡単だが、実際には様々な困難があることが分かっただけでも十分な成果だと思います。ぜひ、続けてたくさんの方々から話を聞いてほしいです。

(宮城能彦)